

資 料

八幡学園における入所児の実態と教育・保護の内容 — 昭和12(1937)年～同17(1942)年の処遇方法と物的・人的環境を中心として —

高野 聡子

八幡学園は昭和3(1928)年に久保寺保久によって設立された精神薄弱児施設である。本研究では昭和12(1937)～同17(1942)年を検討対象時期に設定し、学園における教育と保護の内容について検討した。検討の結果、この時期の八幡学園では白痴児が増加するとともに、年長者の割合が性格異常と魯鈍において上昇していたが、学園では生活場面と作業場面で類型化した班単位の処遇方法を採用することによってこの課題を克服していた。しかし、実際には班単位で活動しない入所児もあり、個々の特性や実態を適切に把握し、その入所児に必要な処遇内容が提供されていた。このような処遇内容と方法が可能であった背景には、昭和13(1938)年の手工芸作業所の新築、昭和16(1941)年の農地確保といった物的環境の整備と、久保寺園長の家族や親族を中心とする職員の中に、専門的知識を有する人材がいたことも要件の一つにあった。

キー・ワード：八幡学園 精神薄弱児施設 久保寺保久 貼絵

I. はじめに

八幡学園(現在、社会福祉法人春濤会八幡学園)は久保寺保久(1891-1942)によって昭和3(1928)年に千葉県東葛郡八幡町(現在、同県市川市北方)に設立された精神薄弱児施設である。八幡学園に関する研究には、蒲生・内海(2008)と山田(2009)¹⁾の通史的研究の他に、入所児の階層²⁾、久保寺の障害児観³⁾、学園の建築計画史に関する研究^{4) 5)}がある。また、高野(2013a)は上記の先行研究を踏まえて、昭和7(1932)～同12(1937)年の初期八幡学園に時期を設定し、その時期の教育と保護の内容について検討した。

だが、上記の研究では昭和13(1938)年以降の八幡学園における教育と保護の具体的な内容や方法については資料収集の限界から不明部分

が残されたままである。そこで、本研究では学園の日々の様子が記録された「学園日誌」(昭和12[1937]～同16(1941)年)、入所児が書いた「絵日記」(昭和17[1942]年)、入所児一覧や収支決算報告書などが掲載された「八幡学園概要」(昭和10(1935)年、昭和12[1937]～同17[1942]年)等の一次資料や、戸川行男(1903-1992)の『特異児童』⁶⁾で記述されている学園内の様子等を資料として用いて、当時の入所児の実態、学園の日課、実際に行われていた教育内容と処遇方法、園舎の配置、職員を分析の視点に設定し、学園における教育と保護の内容や方法の全体像を明らかにすることを目的とする。

また、本研究の対象時期は昭和12(1937)～同17(1942)年とするが、この時期は八幡学園の敷地内に「手工芸作業所」が新築され、現在の学園の所在地へ移転するなど戦前期の学園における活動内容の充実化が図られる時期であ

Table 1 八幡学園における入所児総数・障害の割合（昭和12～14・17年）

	入所児総数	性格異常		魯鈍		痴愚		白痴	
		人	%	人	%	人	%	人	%
昭和12年	35	7	20	7	20	12	34	9	26
昭和13年	36	6	17	10	28	10	28	10	28
昭和14年	36	4	11	8	22	12	33	12	33
昭和17年	39（うち1名不明）	1	3	7	18	9	24	21	55

出所：八幡学園概要 昭和12年3月31日現在、昭和13年3月31日現在、昭和14年3月31日現在、昭和17年3月31日現在

*1 昭和17年の不明1名については、パーセンテージの計算には含まれていない

*2 パーセンテージは小数点第一を四捨五入した

る。なお、本研究は歴史研究であり、性格異常、魯鈍、痴愚、白痴等の歴史的用語を使用する。

II. 入所児の障害の程度と年齢の推移

1. 魯鈍・痴愚を中心とした対象想定と白痴児の増加

昭和12（1937）年の八幡学園の入所児は性格異常、興奮性魯鈍、遅鈍性魯鈍、興奮性痴愚、遅鈍性痴愚、興奮性白痴、遅鈍性白痴、軽白痴、重白痴、聾啞白痴、聾啞重白痴というように11種類に分類されている。さらに昭和13（1938）年、昭和14（1939）年、昭和17（1942）年も同様に入所児の障害の程度が細かく分類され、障害の程度を示す用語の数も増えているほどである⁷⁾。

そもそも八幡学園では昭和9（1934）～昭和11（1936）年まで、入所児の障害の程度を性格異常、魯鈍、痴愚、白痴の4つに分類し、魯鈍、痴愚、白痴を総称して精神薄弱としていた（高野 [2013a] 199-204）。したがって、八幡学園では昭和12（1937）年以降、障害の分類に下位項目が設けられ細分化されるようになったのである。ついで魯鈍、痴愚、白痴の下位項目には、興奮性と遅鈍性といった指標が見られ、久保寺は精神薄弱児を本能、情緒、日常の気分からまとめれば、精神薄弱児は興奮性と遅鈍性の2種類に分けて捉えられると述べており（久保寺 [1936] 9）、彼は八幡学園の入所児の精神薄弱の程度を興奮性ならびに遅鈍性という指標からも捉えていたのである。

ところで、魯鈍、痴愚、白痴といった精神薄弱とは別に、性格異常とはどのような状態を示したのであろうか。久保寺はこの性格異常を不良少年に類するような児童と説明しており、学園創設初期から精神薄弱とは異なる特性を持つ性格異常の児童の処遇を八幡学園でしていた⁸⁾（高野 [2013a] 199-202）。

それでは各障害の割合はどのようになっていたのだろうか。昭和12（1937）～14（1939）年、そして昭和17（1942）年の入所児の障害の程度を、Table 1のように性格異常、魯鈍、痴愚、白痴の4つの分類で分ければ、次のような傾向が見られる。

まず、昭和12（1937）年では痴愚の割合が34%と最も多いが、昭和13（1938）年では魯鈍、痴愚、白痴のいずれの割合も等しく28%になり、精神薄弱の間で割合の比率に差が見られなくなる。だが、昭和14（1939）年になると、痴愚と白痴の割合はいずれも33%に上昇するとともに、痴愚と白痴の占める割合が入所児全体に対して高くなる。そして昭和17（1942）年には白痴が55%に達する。すでに白痴の上昇傾向は、昭和9（1934）年以降からわずかながらみられたため（高野 [2013a] 203-204）、昭和17（1942）年に至る過程で段階的な上昇がみられ、結果として八幡学園の入所児の障害の程度は白痴中心になったといえる⁹⁾。

それでは白痴の比率の上昇は、八幡学園が意図したことなのだろうか。昭和13（1938）年の八幡学園規則では、その第1条目的で、学園の

主要事業として精神薄弱者に対する養護、訓練及び特殊教育をあげている（八幡学園パンフレット）¹⁰⁾。したがって、八幡学園の主たる対象は精神薄弱であった。このことは、性格異常の割合が、昭和13（1938）年に17%、昭和14（1939）年11%、昭和17（1942）年に3%といった割合の低さからも、主たる対象を性格異常ではなく精神薄弱にしようとしていたことがわかる。

そして八幡学園規則の第7条不許可の項では、入園不可として「精神病者、盲者、聾啞者、不具者、伝染病者」をあげている（八幡学園パンフレット）。だが、昭和12（1937）年に聾啞重白痴、聾啞白痴、聴啞白痴の入所児が合せて4名おり、精神薄弱と他の障害を併せ持った入所児は昭和13（1938）年・14（1939）年、昭和17（1942）年でも確認できる¹¹⁾。

ではなにゆえ、久保寺は主たる対象として想定していなかった性格異常と、他の障害を併せ持つ精神薄弱を処遇していたのであろうか。このことは彼の施設機能論と対象論ならびに当時の精神薄弱児を取り巻く状況から明らかになる。彼は精神薄弱を収容する機関を4つに分けて論じており、それは、①児童精神病院（対象は興奮性白痴、変質性痴愚）、②第一種精神薄弱療護院（対象は反社会性痴愚魯鈍）、③白痴院（対象は遅鈍性中間性白痴）、④第二種精神薄弱児療護院（対象は犯罪不良行為を伴わぬ痴愚魯鈍）であった（久保寺〔1940〕21-22；山田〔2009〕245）。したがって彼の施設機能論と対象論では精神薄弱の障害の程度を細分化したうえで処遇することが構想されていた。

さらに、精神薄弱以外のIQ75～90の遅鈍で境界線の者（職業教育可能な軽度精神欠陥）は補助学校と補助学級、そして少年院と少年教護院で収容し、彼らには特殊教育が必要であると考えていた（久保寺〔1940〕21-22）。久保寺が前述の②第一種と④第二種のどちらを八幡学園として想定したいのかは定かではないが、（第一種と第二種を併せた）精神薄弱児施設という枠組みでみれば、魯鈍と痴愚こそが、八幡学園

のような精神薄弱児施設の対象として想定されていたといえる。

しかしながら、上記の施設機能論と対象論の構想と現実的な状況には乖離があった。なぜなら当時の国内の精神薄弱児施設は10箇所程度と少なく、精神薄弱児保護法も未制定であった。久保寺はこの状況を克服しようと、日本精神薄弱児愛護協会の設立に尽力し、精神薄弱保護法制定の運動を行っていたが制定には困難を極めていた¹²⁾。言い換えれば、彼が提起した施設機能論と対象論は当時の精神薄弱児施設が抱えていた課題や問題を解決しようとするものであり、その点で評価に値するといえよう。だが、八幡学園そのものが置かれた状況は学園規則では想定していない性格異常と白痴の入所を認め処遇しなければならない状況に直面していた。

2. 15歳以上の年長者の増加

次に、入所児の年齢を分析するための一つの指標として、八幡学園規則の第4条年齢がある。この第4条年齢の項では、入園時の年齢は6歳以上15歳未満を原則とし、査定の上、除外例を認めるとしていた（八幡学園パンフレット）。また、同条では入園中に15歳を超えた場合には委託者や保護者の希望によって在園を許可するとしていた（八幡学園パンフレット）。すなわち、八幡学園では入所児の年齢を6歳以上15歳未満に想定していたのである。

それでは実際はどうであったのか。Table 2のように15歳未満の年少児と15歳以上の年少者で入所児を分ければ、次のような割合になる。まず、昭和12（1937）年と昭和13（1938）年では半数以上が15歳未満の年少児であったが、昭和14（1939）年になると15歳未満と15歳以上の割合が半々になり、昭和17（1942）年に15歳以上の年長者割合が58%になり、それまでと逆転して15歳以上の年長者が半数を占めるようになる。

さらにTable 3では障害の程度ごとの15歳以上の割合を示した。昭和12（1937）年と昭和13（1938）年で15歳以上の割合が最も多いのは魯鈍である。白痴に限っては、昭和12（1937）年

Table 2 八幡学園における15歳未満・15歳以上の割合（昭和12～14・17年）

	入所児総数	15歳未満		15歳以上	
		人	%	人	%
昭和12年	35	20	57	15	43
昭和13年	36	24	67	12	33
昭和14年	36	18	50	18	50
昭和17年	39（うち1名不明）	16	42	22	58

出所：八幡学園概要 昭和12年3月31日現在、昭和13年3月31日現在、
昭和14年3月31日現在、昭和17年3月31日現在

*1 昭和17年の不明1名については、パーセンテージの計算には含まれていない

*2 パーセンテージは小数点第一を四捨五入した

*3 入所児の年齢は数えて記録されていた

Table 3 八幡学園における各障害程度における15歳以上の割合（昭和12～14・17年）

	性格異常		魯鈍		痴愚		白痴	
	人	%	人	%	人	%	人	%
昭和12年	3	43	5	71	6	58	0	0
昭和13年	3	50	7	70	3	30	0	0
昭和14年	3	75	6	75	8	67	1	8
昭和17年	1	100	7	100	7	78	7	33

出所：八幡学園概要 昭和12年3月31日現在、昭和13年3月31日現在、
昭和14年3月31日現在、昭和17年3月31日現在

*1 昭和17年の不明1名については、パーセンテージの計算には含まれていない

*2 パーセンテージは小数点第一を四捨五入した

*3 入所児の年齢は数えて記録されていた

と昭和13（1938）年に15歳以上は0%と皆無である。そして昭和17（1942）年になると、入所していた性格異常と魯鈍は15歳以上となり、痴愚においても15歳以上は78%になる。すなわち、八幡学園が想定していなかった15歳以上の年長者は、性格異常と魯鈍に占める割合が高かったことになる。

以上のように先述の障害の程度と年齢比を併せてみれば、当時の八幡学園の入所児の実態は次のようになる。それは昭和12（1937）年から同17（1942）年の5年間の間に、障害の程度が痴愚中心から白痴中心に変化し、15歳以上の年長者は性格異常や魯鈍に多く見られた。したがって、八幡学園に求められた教育内容と処遇方法は、年少ではあるが障害が重度（白痴）

である入所児の教育と、軽度の障害（性格異常と魯鈍）の年長者に適した内容が必要な状態にあった。

Ⅲ. 八幡学園における教育内容と処遇方法

1. 規律正しい日課と職業教育の初歩としての学課・作業

これまで八幡学園の戦前期の日課は大まかには分かっていたが、時刻までは明らかになっていなかった¹³⁾。だが、本研究ではTable 4のように昭和12（1937）年の八幡学園夏期日課表を明らかにすることができた。

まず、Table 4をみれば八幡学園では起床後、洗顔、掃除などの身支度を整え、朝食を取り、点呼、朝礼、訓話を行っていたことがわかる。

八幡学園における入所児の実態と教育・保護の内容

Table 4 昭和12(1937)年 八幡学園 夏期日課表

5:30～6:00	起床、洗顔、掃除、国旗掲揚
6:10～6:40	朝食
6:50～7:20	点呼、朝礼、訓話
7:20～7:35	ラジオ体操
8:00～8:20	日記
8:30～11:30	午前課業（組別）
12:00～12:30	昼食
13:00～14:00	午睡
14:30～16:30	午後作業（組別）
16:30～17:00	掃除
17:00～17:30	夕食
18:00～20:00	自由遊戯（ラジオ、〇〇、柔道、剣道、ピンポンその他）
18:30	国旗下し方
20:00	年少者就床
21:00	年長者就床

出所：八幡学園学園日誌昭和12(1937)年6月28日

朝の時間に行われたこの点呼は何を目的に行われていたのだろうか。八幡学園では班編成が取られていたのだが（班編成についてはⅢ. 2で後述）、点呼は班員を確認するために行われていた（戸川 [1935] 13）。点呼が班ごとに行われた様子は、下記の入所児A¹⁴⁾の日誌からもわかる。

昭和17(1942)年10月30日

入所児Aの日記 抜粋ママ

今日は朝は起きてすぐ顔を綺麗に洗って洗面報告 班長各班並んで 第何班長並んですぐ先生の前に報告をした

次の日課はラジオ体操、日記となっている。日記が毎日の習慣であったことは、昭和12(1937)～同15(1940)年の学園日誌の記録からも明らかである。日記の時間では前日の内容を振り返って書いていたようだが（戸川 [1935] 12）、下記の昭和17(1942)年の入所児Aの日記

で書かれているように、この頃は夕食後にその日にあったことを書いていたようだ。

昭和17(1942)年12月1日

入所児Aの日記 ママ

今日朝から掃除をすんでから朝食を食べてすむと皆運動場へ出て遊びました 午後から又運動場に居て遊ぶをした 空が暗く来ました 皆児童室へ入って電気を付けて遊んだ もう七時から八時迄日記付けスラ、と文を書いて居ながら八時に成りました 皆な日記をやめて鉛筆箱入れて寝床付いて洋服を皆脱いでゐながら寝ました

続いて午前中に課業（組別）、昼食、午睡、午後の作業（組別）という日課が組み立てられていた（組別についてはⅢ. 2で後述）。昭和12(1937)～同16(1941)年の学園日誌には、課業と作業で行われた内容が教師によって記録されているが、なかでも昭和12(1937)年の学園日

誌は、「学課」と「実科」に欄を分けて細かに記録している。

例えば昭和12(1937)年の学園日誌を一年間通して読むと、学課(課業)と作業(実科)で行われた内容は次のようになる。学課では日記、算術、唱歌、読方、作文、図画、地理、歴史等が行われている。日記は、課業とは別の時間に設定されていた活動内容であったが、八幡学園では日記もまた課業の一つとして捉えられていたといえる。また、作業では貼紙(貼絵)¹⁵⁾、竹細工、木工、ボタンつけ、組紐、ガラス拭き、庭掃除、フランス刺繍、紙ロープ細工、消毒、洗濯、水彩画、クレヨン画、写画、布団づくり、写字、紙細工が組別で行われていた。

では学課(課業)と作業(実科)は何を目的として行われたのだろうか。久保寺は八幡学園での活動内容には、①生活訓練、②情意教育、③職業教育の三段階があると説明する(久保寺[1940] 23-25; 山田[2009] 248)。①生活訓練とは、「規律正しい厳格な日常行動」を学園内で行うことによって、入所児が学園に入所する前からの「悪習慣から彼等を解放」するための段階であった(久保寺[1940] 24)。したがって八幡学園が日課表に基づいて一日の生活を送る理由は、規律正しい日課そのものを入所児の生活訓練の一つとして捉えていたからである。

次の段階は②情意教育である。この情意教育は「身体鍛錬」と「美的教化」とから成り、「美的教化」とは「絵画、演劇、映画、音楽、童話、詩歌、唱謡等」を通して育まれ、この「美的教化」を行うことによって、入所児の「自己中心な情意が陶冶」され、「善美なる方向に走らしめ」、「比較的高等なる情操を涵養」すると考えられていた(久保寺[1940] 24)。昭和13(1938)年度の八幡学園の備品一覧からも、「美的教化」への取り組みが学園内で実際に行われていたことがわかる。その備品一覧では、児童教化娯楽用としてラジオセット、大オルガン、蓄音機、アコーディオン、ギニョール人形舞台、大型積木、恩物が掲載されており(八幡学園昭和13年概要)、美的教化のための物的環境が学園内

に整えられていた。

以上の①生活訓練と②情意教育の段階が終わると、③職業教育の初歩の段階になる。久保寺はこの職業教育の初歩の段階では複雑な学科的作業ではなく、実科的作業が良いと考えた(久保寺[1940] 25)。実科的作業の具体的な内容として工芸的技術、簡単な手工具器械の操作、農耕園芸、果樹栽培、家禽飼養、牧畜などをあげ、とくに現在(昭和15[1940]年)学園で行われている実科として、絲布細工、ミシン裁縫、刺繍細工、紙材細工、木竹細工を報告している(久保寺[1940] 25-26)。これらの実科の内容を実施するには、それ相応の機材や備品はもちろんのこと、それを教授できる人材が必要であるが、学園にはこれらの条件が備わっていた(詳しくはⅢ.3で後述)。

そして午後の作業が終わると、掃除、夕食、自由遊戯、国旗下し方を経て就床となった。自由遊戯の時間は2時間設けられているが、ここではラジオ、柔道、剣道、ピンポン、詩吟などが行われていた。学園内では柔道大会、剣道試合、詩吟大会も盛んに開かれており、学園日誌には、剣道試合の対戦結果、詩吟大会の結果などが記録されている。また、学園の柔道の様子については『柔道』という柔道雑誌に「八幡学園参観記」が掲載されているほどであった¹⁶⁾。

2. 生活班と作業班および自治会の開催

では、上記のような規律正しい日課を基本にして、入所児をどのようにして処遇していたのであろうか。八幡学園では処遇に際して生活一般を伴にする班と、作業を行うための班との2種類の班を設けていた。

(1) 生活一般を伴にした班編成

まず、生活一般を伴にする班編成についてみてみよう。久保寺は八幡学園では、児童は3～4人ずつで班に分かれ、「兄」が「弟を率い」て「先入者よく後進を導き、親和のうちに集団的寮舎生活を営む」と説明しており(久保寺[1940] 25)、先述の朝の点呼はこの班を単位に行われたといえる。この班分けを入所児の何(属性など)を基準にしていたのかは、資料収集の

八幡学園における入所児の実態と教育・保護の内容

Table 5 昭和13(1938)年 班の編成替え

	1人目		2人目		3人目		4人目	
	障害の程度	年齢	障害の程度	年齢	障害の程度	年齢	障害の程度	年齢
第一班	興奮性魯鈍	12	軽白痴	10	興奮性魯鈍	12	不明	
第二班	遅鈍性痴愚	14	遅鈍性痴愚	7	遅鈍性痴愚	15		
第三班	興奮性魯鈍	17	興奮性白痴	8	聴啞白痴	14		
第四班	性格異常	17	重白痴	9	興奮性魯鈍	22		
第五班	性格異常	14	遅鈍性痴愚	13	興奮性痴愚	14		
第六班	興奮性魯鈍	18	興奮性魯鈍	11	遅鈍性痴愚	18		
第七班	興奮性痴愚	29	重白痴	12	興奮性痴愚	14		
第八班	遅鈍性魯鈍	15	不明		遅鈍性痴愚	13		
第九班	性格異常	13	聾啞白痴	8	興奮性痴愚	19		

出所：八幡学園学園日誌昭和13(1938)年2月26日

限界を理由に現時点では不明である。だが、昭和13(1938)年2月26日の学園日誌には班替えと班替え後の入所児の名が教師によって記録されている。その記録から各班の障害の程度と年齢を表にするとTable 5のようになるが、この表から班分けの基準が障害の程度と年少・年長といった年齢だけでは説明できないことがわかる。

例えば、第二班は3人全員が遅鈍性痴愚であったし、第三班は興奮性魯鈍の一人を除けば、その他3名は白痴であった。一方、年齢についても、15歳以下の年少児だけの班（第一班と第五班）もあれば、年少と年長が組み合わさった班もある。したがって、生活一般を伴にする班は、障害の程度や年齢のみならず、個々の入所児が有する性格や特質といった個々のニーズを考慮して班分けが行われていたといえる。

なお、久保寺が説明していたように各班3～4人で構成されていることはTable 5からも明らかである。だが、当時の入所児一覧とこれを照らし合わせれば、班に属していない入所児が少なくとも6名いたことが確認できる。したがって、八幡学園には班（生活一般を伴にする班）に属していない入所児もいたと考えられるが、班に属していない入所児の障害は必ずしも白痴ではないため、障害が重いことが理由で班に属

していなかったとは説明できない。

(2) 作業を行うための班（級）編成

一方、作業を行うための班は入所児が能力別に、A（補導）、B（促進）、C（補助）、D（監護）に分けられ、A級の入所者が「ビック、ブラザー」としてB級以下の入所者を補導することになっていた（久保寺〔1940〕25-26）。

班分けの基準は、A級は「知能低劣性格異常者」、「境界線級遅鈍」、「軽症魯鈍」、B級は「重症魯鈍」、「軽症魯鈍」、C級は「重症痴愚」、「軽症白痴」、D級は「重症白痴」、「身神欠陥顕著者」で分けられていた（昭和15年八幡学園概要）。したがって、能力別の基準には障害の程度が一つの指標になっていた。

では、各級でどのような作業を行っていたのだろうか。学園日誌には入所児がどんな作業を行っていたかが記録されている。とくに昭和12(1937)年7月頃の学園日誌では、班単位での作業内容が記録されているが、それをTable 6に示せば、A班は竹細工、B班は明記なし、C班は水彩画、D班は水遊び、写画、積木を行っていた。また、昭和13(1938)年の記録ではB班は貼絵と図画、D班はクレヨン画、チョーク画を行っていた。

さらにTable 6をみれば、班とは別に個人で作業を行った入所児AとB¹⁷⁾もいた。彼等がそれ

Table 6 昭和12(1937)年 実科作業(7月19日～31日)

		A組	B組	C組	D組	入所児A	入所児B
7月19日	月	竹細工	明記なし	水彩画	水遊び、 積木	図画	貼紙
7月23日	金	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月24日	土	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月25日	日	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月26日	月	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月27日	火	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月28日	水	竹細工		水彩画	写画、 水遊び	図画	貼紙
7月29日	木	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月30日	金	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙
7月31日	土	竹細工		水彩画	水遊び	図画	貼紙

出所：八幡学園学園日誌昭和12(1937)年7月19～31日

ぞれ行った作業は図画、貼紙(貼絵)であった。すなわち、作業は班を単位に実施されたが、班に属することが難しい、あるいは配慮が必要な入所児には、学園の教師が異なる作業を個別に提供していたといえる。したがって、先の生活一般を伴にする班と同様に、学園では集団での活動を基本にはしていたが、入所児個々のニーズと特質に応じた内容を提供していたといえる。これを実現するには、多くの作業を用意しなければならないが、八幡学園の作業の内容が木工係、裁縫系、芸術系、農作業系など非常に多岐に渡ることからもそれが可能であったことが説明できる。また、貼絵や絵画に秀でた芸術性を見出された入所児もいたことも個々のニーズに応じたていたことを考えれば納得できる。

とくに、貼絵の作品で有名であった入所児Bの場合にはそれが顕著である。例えば複数の入所児が集団で竹細工を行っている一方で、彼は単独で貼紙(貼絵)を行っている。学園日誌を横断的に読んでみても、彼はほぼ毎日、貼紙(貼絵)を行っており、他の入所児が様々な実科を経験するなかで一つの特定の作業を行って

いる。

では、なぜ入所児Bは貼紙(貼絵)を毎日行っていたのだろうか。久保寺は八幡学園入園当初の入所児Bは、専らちぎり紙細工を行っていたが(まだ貼絵の段階ではない)、これを継続的に繰り返すことによって、色彩に対する興味を持ち、次第に「注意の集中」が高まり、彼の異常行動がおさまったと報告している(久保寺[1938] 3)。そして、学園の教師が入所児Bの昆虫好きに着目し、次の段階として昆虫の写生に取り組み、最終的に貼絵を作業の時間に行うようになった(久保寺[1938] 3)。貼絵が彼に適した作業となった理由は、色鉛筆、クレヨン、クレパスを使用した絵に彼は「全く特色がない」ため、色紙を手指で自由に表現することで彼の「心意の安定」が得られるようになったからであった(久保寺[1938] 3)。したがって、Bが貼紙(貼絵)を行うようになった過程には、ちぎり紙細工、写生という作業を通して、学園の教師が彼の実態把握を行った経緯があった。

なお、久保寺は班の単位をA級、B級と呼称して説明したが、学園内ではA班、B班と呼称

八幡学園における入所児の実態と教育・保護の内容

Table 7 昭和13(1938)年 第1・2回自治会参加者

	性格異常	魯鈍		痴愚		不明
		興奮性	遅鈍性	興奮性	遅鈍性	
1月29日	3	3	1	1	0	0
2月5日	4	3	1	1	1	1

出所：八幡学園学園日誌昭和13(1938)年1月29・2月5日

していたようである。そのことは下記のような入所児の日記からも明らかである。

昭和17(1942)年11月5日

入所児Aの日記 ママ

今日は朝早く起きて早く農園へ出発をした
僕がホールに紙工部を〇〇君と〇〇君二人
は貼紙をした CD組が運動場で遊びました
正午は農園から帰って来ました 〇〇君が
家から八幡学園へ来園 ミシン部はホールで
〇〇と〇〇二人でやりました 四時頃夕方にな
ってたん、暗くなりました 夜はホールの
電気を付けて日記を付けて居ました

(3) 性格異常と魯鈍を中心とした自治会の開催

八幡学園では入所児による自治会も開かれていた(久保寺[1940]25)。自治会の第1回目は、昭和13(1938)年1月29日からで、その後も土曜日の午後を中心に行われていた。第1回の自治会の様子は、戸田(1935)においても述べられているが、第1回は8名の入所児が参加し、議長を投票で選び、12議題について話し合った(学園日誌昭和13年1月29日：戸川[1935]15-21)。議題は事前に入所児が学園の教師に提出し、その内容は学園の生活で困っていること、変えたいことなどであり、例えば(入所児同士で)「掃除を充分にして欲しい」、(入所児同士で)「下駄を整理してほしい」などであった(学園日誌昭和13年1月29日)。

この自治会への出席者はTable 7に示した通りであるが、障害の程度は、痴愚が1～2名い

るものの、性格異常、魯鈍がほとんどで軽度の入所児が参加していたといえる。戸川によれば、この自治会には班長級だけが参加したようである(戸川[1935]15-16)。したがって、自治会は軽度の入所児のための教育内容であったといえよう。

以上のように、八幡学園では生活一般を伴にする班、作業を行う班、自治会などの集団活動を通して課業や作業が行われていたが、一方で入所児の障害の程度や年齢だけにこだわらず、入所児の実態を多角的に把握することを重視し個別の課業と作業も用意していたのである。

3. 作業の充実化のための物的・人的環境の整備

様々な作業を行うには物的・人的環境が不可欠であるが、本研究の対象時期の八幡学園ではこれらの条件が整備されていく。

(1) 昭和13(1938)年12月の手工芸作業所の新築

これまで先行研究並びに八幡学園の沿革史では、昭和12(1937)年12月に「手工芸作業所」一棟が学園敷地内に新築され、この建築によって学園の作業内容の一層の充実が図られたと考えられていた(清水・三輪[1977]28；山田(2009)240；社会福祉法人八幡学園六十周年編集委員会(1988)40；久保寺光久[2006b]1)。

だが、本研究において「学園日誌」と「八幡学園の概要」に記載された収支決算書を分析した結果、手工芸作業所の新築時期は通説よりも1年後の昭和13(1938)年12月であったことが明らかになった。このことは、学園の作業内容を検討するうえでも重要な史実であるため、ここでは新築までの過程について再検討を行う。

そもそも、八幡学園では学園創設後から度々増築と新築を繰り返しており、このことが先行研究等で錯誤が起きた理由とも想像できるが、増築・新築の順序を整理すれば次のようになる。まず昭和3（1928）年12月に聖愛寮と聖光寮を開設し、昭和5（1930）年4月に聖望寮を新築した（昭和12年八幡学園沿革大要）。そして昭和8（1933）年5月に聖望寮を改増築し、昭和12（1937）年5月に増築と改築を行ったと記録されている（昭和12年八幡学園沿革大要）。この昭和12（1937）年5月の増築・改築こそが、先行研究等において手工芸作業所の新築がなされたと解釈された増築・改築である。

しかしながら、昭和12（1937）年度の収支決算書には手工芸作業所の新築は記載されていない。昭和12（1937）年は、聖光寮に2階（児童診査室と製作品陳列室の設置）を増築し、食堂の場所と（聖光寮1階から聖愛寮1階へ）、児童室5室の場所（聖愛寮1階から聖光寮へ）を移動し、浴室の改築を行った年であった。この増改築は、昭和10（1935）年4月現在と昭和12（1937）年5月現在の学園平面図とを比べても明らかである。なお、この増改築は入所児の増加による厨房、食堂、浴室の「不備」から計画されていたことであった（昭和10年度八幡学園概要）。

そして昭和12（1937）年の増改築後の昭和13（1938）年に手工芸作業所の新築が着手される。手工芸作業所の計画は、昭和12（1937）年度の八幡学園概要に、次年度（昭和13年度）予算計画の「手工芸作業所建築及び附属設備予算」臨時費として記載されている。さらに、昭和13（1938）年度の収支決算書の支出を確認すれば、手工芸作業所が15坪1棟で建築され、備品として個別作業台、裁断台、共同工作台、戸棚、研場流台、陳列戸棚、機械工具として裁縫ミシン機、足踏式糸鋸機、丸砥グラインダー、万力、砥石が購入されたことが記載されている（昭和13年度八幡学園概要）。

では、昭和13（1938）年度のいつ頃に、手工芸作業所が新築されたのであろうか。昭和13（1938）年の学園日誌をみれば、昭和13（1938）

年11月4日から建設が始まり、同年12月26日には手工芸作業所が完成し、クリスマス会と新築落成記念式を行ったことが記録されている¹⁸⁾。

以上から手工芸作業所は、昭和13（1938）年12月に新築されたことが明らかになる。すなわち、この手工芸作業所の新築によって、それまで寮母室と兼用であったミシン裁縫室と、室内遊戯運動場と兼用であった木竹工作作業場が、それぞれ手工芸作業所に移動し、作業をするための専用スペースを確保したのであった。

また、手工芸作業所の新築が昭和13（1938）年12月であったため、手工芸作業所での本格的な作業は昭和14（1939）年1月からであるが、同年1月の学園日誌には、糸布工部、木竹工部、紙工部、作文部などといった各作業に部の名称をつけて行っていたことが記録されている。以上から入所児の個々のニーズに応じた作業がより一層充実したのは、通説よりも後の昭和14（1939）年1月以降になる。

（2）区画整理による北方への学園移転と農場の確保

八幡学園は昭和16（1941）年から区画整理を理由に、現在の所在地である北方に移転するが、戦時体制下にあって完全移転は戦前にはできなかった（久保寺光久 [2006a] 1；[2006b] 1：清水・三輪 [1977] 30）。この移転は長期間に渡り、昭和15（1940）年度～同18（1943）年度までの数回に計画を分けて移転を行ったことが、収支決算書や、移転計画からも明らかである。また、学園日誌をみれば、昭和15（1940）年1月より久保寺園長や、主事（渡辺実 [1908-2002]）が学園移転の相談に出かけたこと、同年5月から移転計画¹⁹⁾が作成されたこと、10月には教師と数名の入所児が土地を整備する作業を行ったことも記録されている。そして本格的な作業は同年12（1937）月14日の作業室の取り壊しにみられ、厳密に言うならば昭和15（1940）年12月から移転作業が始まっていた。

さらに移転と同時に八幡学園は農地を確保するようになる（社会福祉法人八幡学園六十周年

編集委員会 [1988] 152)。昭和16 (1941) 年の八幡学園の概要によれば、学園の附属農場は、①本園農場 (学園内、300坪)、②柏井農場 (千葉県東葛郡大柏村柏井、3500坪)、③葛飾農場 (船橋市山野、2300坪) であった (八幡学園昭和16年概要)。そもそも農作業の実施は、初期の八幡学園において久保寺が指導方針の一つとして農園コロニーを構想しており (高野 [2013a] 204-205)、本研究の対象時期に物的環境が整い具現化されたといえる。

昭和16 (1941) 年の学園日誌には、同年3月9日から本格的に農作業を始めたことが記録されており、本園農場、柏井農場、葛飾農場における種まき、除草、収穫などその時期ごとの作業が記録されている。また、入所児Aの日記には農作業に向かう入所児の様子も記録されている。

昭和17 (1942) 年11月1日

入所児Aの日記 ママ

今日朝 農場へ出掛け始めました 空が曇って雨が降り出しました ホールの中に生徒部屋にCD組が寒いさらになって〇まって坐って居る やっと農園から帰って来た 午後は紙工をやりました 一時から四時迄やりました 夕食を食べてから児童室這入りました 電気を付けました

昭和17 (1942) 年11月8日

入所児Aの日記 ママ

今日は朝早く農園組が仕度をして皆と一緒に朝食を食べてから農園組達リヤカー持ち引出し動く走出して農園へ出発をした 正午は昼食すんでから一時より紙工始めました 五時迄止めて電気を付けて晩飯をすんでから児童室で皆生徒日記用具机を日記帳を付け止めました 児童室で皆寝床を付いて寝ました

に、農場での農作業はすべての入所児が行ったわけではなかった。学園では、農作業を行う者もいれば、学園内での作業を行う入所児もあり、昭和16 (1941) 年の学園日誌をみれば、主にC組とD組は学園内での作業に従事していた。

(3) 教育内容と処遇を支えた職員配置

昭和12 (1937) 年、昭和14 (1939)～同15 (1940) 年、昭和17 (1942) 年の職員一覧を見れば、常勤 (嘱託以外) の職員数は昭和12 (1937) 年は6名、昭和14 (1939) 年は8名、昭和15 (1940) 年は7名、昭和17 (1942) 年7名であった。これは職員1名でおおよそ5～6人の入所児を担当することを示しているが、前述 (Ⅱ.1) で述べたように、八幡学園内にて白痴児が増加したことを考えれば (昭和17 [1942] 年の白痴児は21名)、決して職員が多かったとはいえない。

だが、八幡学園には学課と作業を教授できるだけの専門的知識を有した職員がいた。とりわけ、久保寺の家族、親族には芸術に秀でた人物がいた。それは、例えば園長の実弟、久保寺辰夫 (東京芸術学校を卒業、学園では嘱託ではあったが技能科を指導) であり、園長夫妻の三男、堀川恭 (戦後、東京芸術大学を卒業、昭和17 [1942] 年は助手として勤務) などであった (高野 [2013b] 45)。したがって、手工芸の教授や芸術的感性の育成はこのような人材がいたことで可能であったといえよう。

また、園長夫人の実弟の島津眞司 (昭和12 [1937] 年は職員、昭和14 [1939] 年以降は嘱託職員) は、柔道、剣道、絵画、彫刻などの手工芸を指導し、園舎新築や移転に際して尽力していたし、主事の渡辺は松戸園芸高等学校 (現在の千葉大学園芸学部) を卒業しており、園芸に関する知識を持った人物であった。以上から本研究の対象時期における八幡学園では手工芸作業所の新築や、農場の確保によって学課と作業を行うための物的環境を整えるとともに、多岐に渡る内容を指導するだけの才華を持った人物が職員の中にいたのである。

上記の入所児Aの日記に書かれているよう

Ⅳ. 結語—入所児の実態に応じた処遇方法と物的・人的環境

本研究の対象時期である昭和12(1937)～同17(1942)年の八幡学園では、白痴児が増加するとともに、年長者の割合が性格異常と魯鈍において上昇した。このような入所児の複雑多岐な実態を鑑みれば、処遇方法には相当の工夫を要することになる。だが、八幡学園では処遇方法に班を採用することによってこの課題を克服する。そして、班の構成には工夫が見られ、生活場面と作業場面それぞれで類型化した。

しかしながらこの類型化した班による処遇方法は、一見すると様々な特性や特質を有する入所児に対応しきれないようにもとれる。しかし、実際には班単位で活動しない入所児もあり、個々に必要な処遇内容が提供されていた。このような処遇内容と方法が可能であった背景には、何よりも物的環境の整備と人的環境が整っていたからであった。

ところで、この時期の八幡学園は社会一般においてどのように評価されていたのだろうか。その一つには、昭和13(1938)年に千葉県立図書館で開催された「園児作品展」を端緒に高まった入所児の作品に対する反響の大きさがあげられる。これは、特別な処遇内容や方法を必要としている子どもが潜在的に持っていた芸術性への注目と驚きであった。もちろん、久保寺もまた、その反響に応じて入所児の作品展を開催するのであるが、それと同時に彼は社会における精神薄弱児施設の意義を講演等で説いていく。その講演は、遠く大連・満州にまで及び²⁰⁾、その後は精神薄弱児保護法制定の運動も展開していく。

したがって、本研究に残された課題は次のようになる。それは、本研究で明らかになった八幡学園内部における教育と保護の内容と方法を踏まえて、学園が外部に説いた精神薄弱児施設としての教育と保護の効果と意義について検討することである。これらを明らかにするためには久保寺の講演内容、精神薄弱児保護法の制定運動を検討するとともに、八幡学園が設置した

三輪異常児相談所における相談内容の分析が必要である。

付記

資料収集に際して、社会福祉法人春濤会八幡学園、長谷川仏教文化研究所の皆様には多大なるご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。

本研究は科学研究費(基盤研究(B), 課題番号23330278)の一部として行った。

註

- 1) 山田(2009)は、山田が1970年代を中心に発表した八幡学園に関する論文を他の精神薄弱児施設と併せて出版した著書である。
- 2) 入所児の階層を分析した研究には藤田(1977)、内海(1978)、山田(1977; 2009)がある。
- 3) 山内(2003)は久保寺の障害児観について検討した。
- 4) 清水・三輪(1977)は園舎の増改築や移転に関する建築計画史を研究した。
- 5) その他には大内(2010)の入所児の作品展に関する研究がある。
- 6) 戸川行男は早稲田大学心理学教室の教授で、「第二回特異児童作品展」の監修をした。また、昭和14(1939)年に東京市下谷区三輪町の同善会内に設けられた三輪児童相談所で、久保寺とともに心理検査を担当した(三輪児童相談所パンフレット)。
- 7) その他、障害の程度を示す言葉には、癲癇性重白痴、聴啞重白痴、興奮性軽白痴、遅鈍性重白痴などがある。
- 8) 性格異常と同じ程度を意味する言葉として、久保寺は精神低格を使用することがあったが(高野[2013a] 199-202)、昭和11(1936)年以降からは性格異常を使用していた。
- 9) 山田(2009)においても、白痴者数の増加が指摘されている(山田[2009] 242; 247)。
- 10) 昭和10(1935)年に学園規定は改訂されたが(高野[2013a] 203-204)、昭和13(1938)年頃に作成されたとみられる「公認精神薄弱児童救護施設八幡学園」(パンフレット)の学園規定は昭和10年度と同じ規定であった。
- 11) その他に、脳水腫を併せ持った遅鈍性痴愚、小児麻痺症を併せ持った興奮性痴愚などの記録がある。

八幡学園における入所児の実態と教育・保護の内容

- 12) 日本精神薄弱児愛護協会は、昭和9 (1934) 年10月22日に設立されたが、設立に際して久保寺と浅草寺カルナ学園の主事であった林蘇東 (1896-1956) の二人の尽力があった。日本精神薄弱児愛護協会を設立した後、昭和10 (1935) 年10月23～26日に開催された第八回全国社会事業大会で精神薄弱児保護法の制定と要望・提案するが、精神薄弱保護法の制定に関する研究には、山田 (2009) の他に、平田 (1995) と北沢 (1985) がある。なお、著者は平成26 (2014) 年社会事業史学会第42回大会の自由論題報告で発表した論文としては未稿である。
- 13) 昭和11 (1936) 年の日課では痴愚以上を対象にして午前に学課、午後に実科を行っていた (高野 [2013a] 206)。
- 14) 入所児Aは、大正15 (1926) 10月8日生まれで、昭和11 (1936) 年3月8日に八幡学園に入所した。障害の程度は入所児一覧では興奮性痴愚であった。
- 15) 八幡学園の学園日誌を見れば、貼紙と呼称する場合もあれば貼絵という呼称する場合もあった。
- 16) 林 (1940) では、八幡学園内に仮設道場が設けられ、受身の練習などが行われていることなどが書かれている。
- 17) 入所児Bは、大正11 (1922) 年3月10日生まれで、昭和9 (1934) 年5月18日に八幡学園に入所した。障害の程度は入所児一覧では性格異常であった。
- 18) 清水・三輪 (1977) で示されている「第Ⅲ期配置図および平面図」は、昭和13 (1938) 年12月時点の平面図になる。
- 19) 移転に関する一次資料には、昭和15 (1940) 年5月に書かれた「八幡学園移動拡張計画実施に就いて助成団体への冀望」がある。また、昭和16 (1941) 年度八幡学園概要には、昭和16年度に第二期工事が行えなかったことが報告されており、昭和17 (1942) 年度八幡学園概要に「学園移転拡充第三期計画 (次年度予定)」が記載されている。
- 20) 昭和14 (1939) 年7月27日から9月1日までのおよそ一箇月をかけ、大連・満州と京城を廻り、大連市と奉天市、新京市で講演や座談会を行った。

文献

- 藤田誠 (1977) 八幡学園における経営と処遇－財政分析の試み－. 精神薄弱問題史研究紀要, 21, 36-44.
- 蒲生俊宏・内海淳 (2008) 久保寺保久と八幡学園－踏むな、育てよ、水そそげ－. さぼーと, 55(10), 48-52.
- 林静夫 (1940) 精神薄弱児救護施設八幡学園参観記. 柔道, 11(10), 30-32.
- 平田勝政 (1995) 戦前の社会事業分野における「精神薄弱」概念の歴史的研究Ⅱ (下). 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 49, 59-76.
- 北沢清司 (1985) 昭和戦前期精神薄弱者保護法制定運動の検討. 大正大学研究紀要佛教学部・文学部, 70, 121-143.
- 公認精神薄弱児童救護施設八幡学園. (本文中では八幡学園パンフレットと表記, 内容から昭和13年頃).
- 久保寺光久 (2006a) 学園園舎の変遷とその思い出を辿って. 稷穂, 93, 1.
- 久保寺光久 (2006b) 学園園舎の変遷とその思い出を辿って. 稷穂, 94, 1.
- 久保寺保久 (1936) 精神薄弱児の心理学的分析. 私設社会事業, 37, 8-11.
- 久保寺保久 (1938) 知能低弱なる特異児童の労作と教養に就いて. 少年の保護, 95, 2-4.
- 久保寺保久 (1940) 特異児童の生きる道. 特異児童を護れ, 23-35.
- 三輪異常児童相談所 (発布年不明、本文中では三輪異常児相談所パンフレットと表記.)
- 大内郁 (2010) 昭和10年代「特異児童作品展」と同時代の「能力」言説一試論. 人文社会科学研究, 21, 62-74.
- 清水紀子・三輪澄子 (1977) 八幡学園建築計画史. 精神薄弱問題史研究, 21, 24-35.
- 社会福祉法人八幡学園六十周年編集委員会 (1988) 社会福祉法人八幡学園創立六十周年記念誌. 社会福祉法人八幡学園.
- 昭和10年度精神薄弱児児童保護教養施設児童教化八幡学園事業要覧.
- 昭和12年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.
- 昭和12年八幡学園沿革大要. (昭和12年5月15日記)
- 昭和12年八幡学園学園日誌.
- 昭和13年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.

高野 聡子

昭和13年八幡学園学園日誌.

昭和14年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.

昭和14年八幡学園学園日誌.

昭和15年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.

昭和15年八幡学園学園日誌.

昭和16年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.

昭和16年八幡学園学園日誌.

昭和17年度精神薄弱児救護施設八幡学園概要.

昭和17年入所児A絵日記.

高野聡子 (2013a) 初期八幡学園における入所児の
障害と教育・保護の内容－昭和7 (1932) 年～昭
和12 (1937) 年を中心として－. 障害科学研究,
37, 197-211.

高野聡子 (2013b) 文学やアートにおける日本の文
化史：八幡学園における芸術教育の歴史－知的
障害児の発達を育む絵画と造形作品－, ノーマ
ライゼーション, 33(8), 44-46.

戸川行男 (1935) 特異児童. 目黒書店. (1947年第

15版を使用)

内海淳 (1978) 八幡学園入園者実態の対象論的分
析－戦前を中心に－. 精神薄弱問題史研究紀要,
22, 7-20.

山田明 (1977) 戦前の精神薄弱者施設における対
象問題の構造－八幡学園、旧筑波学園、滝乃川
学園での調査研究作業から－. 精神薄弱問題史
研究紀要, 21, 9-23.

山田明 (2009) 戦前知的障害者施設の経営と実践
の研究. 学術出版会.

山内弥子 (2003) 昭和前期における障害児観と教
育について－『私設社会事業』誌、八幡学園機
関紙『稔穂』より－. 長谷川仏教文化研究年報,
27, 46-57.

児童教化八幡学園平面図昭和10年4月現在.

児童教化八幡学園平面図昭和12年5月現在.

—— 2014.8.31 受稿、2014.12.22 受理 ——

Method of Instruction and Care for Feeble-minded Children in Yawata Gakuen from 1937 to 1942

Satoko TAKANO

In 1928, Yasuhisa Kubodera established Yawata Gakuen, an institution for feeble-minded children. The institution catered to both children with feeble-mindedness and delinquents. In the institution, from 1937 to 1942, there was an increase in the number of not only young feeble-minded children but also older delinquent children. Therefore, the education provided in the institution had to be based on the individual needs of each child. Nevertheless, the institution overcame this problem by dividing the children in groups and performing activities, such as enacting scenes from professional and daily lives. However, the child who was not suitable for group activity received individual instruction. The activities which the children participated in were diverse, for example, making woodwork and handicrafts, and farming. The collages made by the children of this institution were well known, and numerous exhibitions were held. The reason that the institution was able to perform such activities was because it built a crafts work place in 1938 and received agricultural lands in 1941. In addition, the institution's staff had sufficient technical knowledge.

Key words: Yawata Gakuen for Education and Care of Feeble-minded Children, Institution for Feeble-minded Children, Yasuhisa Kubodera, Collage